

## 山岸文庫蔵『謡秘伝抄』解題

山本和加子

### 一、書誌

『謡秘伝抄』は、本学山岸文庫所蔵の謡伝書である。本書は、縦218mm×横163mmの綴葉装の写本で、料紙はやや厚手の鳥子紙である。表紙には金箔が施されて、枝に鳥の絵柄がある。墨付十四丁、片面十四〜十六行書き、一行あたり十八〜二十八字程で、銀の切箔を置いた前遊紙（一丁）と白紙の後遊紙（二丁）がある。印記は「山岸文庫」の長形朱角印で、表紙と前遊紙にある。書名は、表紙の中央上方の題簽（123mm×22mm）に「謡秘傳抄」と記されているが、内題には「秘密傳」とある。奥書は、「右之條々、覚違聞ちかひも可有候得共、諸人の嘲りをも不恥、書附申候。併、一色も私に作候而書附事、努々無之候。古人の書物共を以、垣田又右衛門、其外方々致執心候而、相尋口伝受候通、少も無他言書あかし申候。更々御他見有問舖物也。以上。」（Ⅰ）と、「此書、当国武田大膳大夫殿一人相伝の旨より外、有之間敷候。観世家之秘密之書也。」（Ⅱ）に続いて「日吉弥右衛門権守空庵入道 寛文五乙巳卯月日」（Ⅲ）と記されている。

## 二、慶安版本『謡之秘書』

さて、そうした奥書存在と「先さし寄て誰も御謡大事の物と申侍り候」の一文から始まる写本『謡秘伝抄』は、武田大膳大夫相伝の観世の秘書とされた謡伝書の版本『謡之秘書』の内容と酷似している。よって、本書の書名は『謡秘伝抄』（内題「秘密傳」）だが、全体を通観すると、『謡之秘書』との密接な関係が推測できる。『謡之秘書』は、慶安五年（一六五二）に刊行された謡伝書で、国立国会図書館・法政大学能楽研究所・同鴻山文庫・早稲田大学演劇博物館など、多数の伝本が知られている。先行の謡伝書の説が多くて、特に独自の新説があるわけではないが、謡の基本を音曲道歌や図によって多面的・具体的に説明しているところから、江戸期の謡伝書の特色を考える上で重要な伝書と位置づけられている。

この慶安五年の版本の『謡之秘書』については、『早稲田大学蔵資料影印叢書・国書篇第三十七卷・能楽資料集二』（平成6年刊）の表きよし氏の解題が詳しい。表氏の「解題」を要約すると、慶安五年刊『謡之秘書』には、同系統の諸本として慶安三年（一六五〇）版本『謡花伝書』（早稲田大学演劇博物館蔵）と寛延四年（一七五二）奥書の写本『謡書』（鴻山文庫蔵、「大野本」と呼称）があるものの、それぞれの記述には出入りが見られるために、これら三本は同じ祖本から転写された別個の写本に基づいているらしい。とりわけて「大野本」は、その奥書の形から他の二本よりも先行する写本からの転写の可能性も指摘されている。

したがって、このような『謡之秘書』関連の版本・写本があつたことからすれば、山岸文庫蔵の写本『謡秘伝抄』の特色は、慶安版本『謡之秘書』と比べることで明らかになると言えよう。

## 三、奥書と本文の異同

## 【奥書】

『謡之秘書』の奥書（Ⅰ・Ⅱ）については、Ⅰは仮託であり、Ⅱは「大野本」が原形で『謡之秘書』はそれを簡略化した、『謡花伝書』はⅠとⅡの二個所の記載をおかしいと感じてⅠの一つに絞ったものと推測されている（前掲「解題」）。本書の奥書には、八木但馬・河井宗以の名はないものの、垣田又右衛門と記して『謡之秘書』（Ⅰ・Ⅱ）のそれとはほぼ同様である。ただ『謡秘伝抄』では前述（Ⅰ頁）の如く、続いて「日吉弥右衛門権守空庵入道」の署名と「寛文五乙巳（一六六五）卯月日」の年記がある。

この「日吉空庵」という人物は、『四座役者目録』（わんや書店刊・能楽史料第六編）の「近代観世方連師手之事」に  
 日吉空庵 黒雪ノ連ヲスル。丹波ニ住ス。観世ノ本ツレ筋ニテハナシ。親ハ、弥右衛門ト云テ、狂言ヲスル。小次郎  
 元頼ナドト、色々セリフ云タル事アリ。……子ノ空庵モ、初二ハ、狂言ヲスル。京ニテ、サイ／＼勸進能ヲスル。  
 声ハ、堅メナ好声音也。能ハ下手也。八十斗ニテ果ル。

と記述されている。日吉空庵については、片桐登氏の詳細な御考察がある（「猿楽「日吉座」考（上中下）」『能楽研究』第6・7・9号、昭和56・57・59年）。以下に要点だけを記すと、まず日吉弥右衛門（初め弥三郎）は、松尾御霊社に参勤していた丹波日吉座の狂言役者であり、空庵の父弥右衛門は狂言役者であった。空庵も当初は狂言を演じていたらしいが、天正・文禄年代に弥三郎・弥右衛門の名で観世座のワキ、慶長十年前後数年間に日吉弥右衛門の名で観世のツレを数多く勤めている。『四座役者目録』が記載するように、空庵は、狂言からワキ、やがて観世黒雪のツレを勤めるようにな

って行った。しかしながら空庵は、慶長十五年以後、先代弥右衛門ら日吉座が盛んに演能活動していた京都の芸能市場としての可能性と、その他への愛着から、観世座を離脱して京都へ移ったと考えられると御指摘されている。そして、天野文雄氏が紹介された『元禄十五年日吉彦大夫願書』の「(由緒書)〔能楽史断章―新資料の紹介を中心に―〕」『上田女子短期大学紀要』第8号、昭和60年)によれば、「空庵」という称号は剃髪後の呼称であり、空庵が「権守」(補任)であったとされる。本書の末尾にも「日吉弥右衛門権守空庵入道」(寛文五年)と署名されているので、江戸初期以降に空庵を「権守」と称することがあったことは間違いない。しかし、確かな生没年は不明ながら慶長年間に活躍して八十才余りで没した空庵が、本書の奥書に記されている寛文五年頃に存命であったとは思えない。したがって、本書の書写年次が奥書の通りであったとすれば、「日吉弥右衛門権守空庵入道」の記述は仮託であろう。

とは言え、表氏の御考察(同前)では、複数の書肆から刊行されている『謡之秘書』の判明している版元が、みな京都の書肆であった。これは、同書が基づいた謡伝書がやはり日吉と何らかの関わりがあったためかと思われるのである。

## 【本文】

〔一ツ書について〕

本書と慶安五年版本『謡之秘書』を比較すると、顕著な相違は一ツ書の記載の順番である。翻刻の際(平成七年刊・本誌『年報』第十四号)に便宜上付した一ツ書の各条の通し番号1～92条までの記載順はほぼ同じだが、それ以降は大きく違っている。そして、その違いは大体、次のようなAからM(丸括弧の内は通し番号、以下同様)のグループに纏めることができる。『謡秘伝抄』で93条になるところが慶安五年の版本はA(119)で、以下に続いてB(101～107)・C(94～96)・D(109～115)・E(93)・F(116～118)・G(120～133)・H(97、98)・I(137)・J(99、100)・K(137)・L(150～153)・M(140～149)の順に記されている。またD・Gなどは、さらにグループ内の一ツ書の記載の順序も違ってい

る。

尚、この94条以降の順序は、慶安三年版本も慶安五年版本と同様である。

〔記述内容について〕

山岸本『謡秘伝抄』と慶安版本を比較すると、一ツ書の順序は異なっていた。そして又、この山岸本は、版本の一ツ書を分割したり纏めてたり、或いは独自の文をも記している点が特徴的である。そこで、本書に対する、版本の主な相違点を取り上げたい。まずは、慶安五年版本と比べた場合の校異を次に記す。

①「扱、小うたひハ序より謡候が能候。……」(2) から「一、それ／＼の位によりて替へし。老若・男女・僧俗にあり」(4) まだが一段落で、一ツ書にしていない。「それ／＼の位によりて」は道歌であり、版本の記述が正しいのであるう。

②「四季の調子・月の調子」(5・6) に「五臓のこゑ」が加えられて一ツ書されている。「月の調子」は円形に記載されておき、「一、調子之性」の記事の一ツ書に続いて「夫、調子ハ両調子かぬる心得」と記している。

③「よき音曲と申ハ謡の面、……」(19) の一文に続く和歌が「逢坂の関の清水に影見へて今や引らん望月の駒」だけではなくて、「逢坂の関のいわかとふみならしやまたち出るきりわらのこま」の二首を版本は記載する。本書も後文に

初の一首ハ、何のふしもなければとも、幾度吟候へ共、口にもあたらす、耳にも立候ハてその感ふかし。後一首ハ打聞所ハおもしろきやう二候得とも、数返吟し候へハ、口にこわく当り、清水の哥ニハ無下におとり候と古人も申置候。

とあって、「初の一首」「後一首」と説明しているから、本来は二首が記されるべきである。

④「一、当座の花・ついの花といふ事」(20)では、「おもふにハ時の花のミかさしつ、ついの花をハ打わするらん」と共に「見たせは花も紅葉もなかりけりうたのとまやのあきのたくれ」の和歌がある。これに関わる両本の内容は同文の部分も含んでいるが、版本では、文章が前後しており、「謡ひやうの合点を能被成候而」以下の道歌直前の一文がないし、また山岸本が記す道歌のうち「出ぬより」を欠く(道歌の異同は後述)。しかし、総じて当座の花・対の花の説明は、版本のほうが分かりやすい。

⑤「一、縮メテ拍子ニ合候ふし、たけの都ちに。一、延て拍子ニ合候ふし、来て鳴く声を聞ハ」(47・48)は謡の文句のみを記して、その間には「一、しのにものおもひ」(芭蕉)が付記されている。「一、上ケ端にしやうねといふ事有」(86)の場合は、版本に「しかれハうねめのたハふれの、しのほとのうたひやう」(采女)と説明がある。同じく、山岸本になくて版本が記すのは(64の後の)「一、炎天 寒天あつしさむし」や(109直前の)「一、きりハさしぬきとて、謡おさめをかるくすて、謡出しを前へかけてうたひいたし申候」もある。

⑥「一、しやうくの習の事。一、宮商角微羽」(51・52)と「口中開口の事」(53)の項目の順が、版本では逆になっている。しかも「口中開口の事」を説明する「一、あいうゑを」(54)以下「一、わいうゑを」(63)が図表で示されている。

⑦「一、シテトワキトツレとの心得」(72)では記載の道歌が同じものの、版本には「わきとしてとのこゝろえ」として、ツレの記述がなく、短い異文が記されている。

⑧「一、シテトワキト問答のうち、地へ渡し様の心得」(73)と「一、曲舞を序破急ト三ツに諷分候」(85)は、何れも60字程度の短い解説だが、版本には記載されていない。

⑨「一、謡をつなぐと云事有。大秘事にて候」(93)に相応する慶安五年版本の一ツ書は、「一、うたひをなくといふ事

あり。少の事にて候へ共、口伝なくてハ書あかしかたく候」と思われるが、山岸本のような〈高砂・定家・源氏供養〉の一節を引用した説明はない。

- ⑩ 山岸本の拍子の関わる記事（120～134）のうち、版本は「一、拍子、句切に有」（126）と同内容のやや詳細な異文を記す。「二拍子・三拍子・六ツ拍子・七ツ拍子」（127・128・131・132）の各項目はない。また「右の拍子共、かやうにこまやかに存候人、当代可有候」（134）の記述はないが、その代わりに「打切・謡出しの五拍子」を一ツ書として、図式（133）の後には打切についての50字程の説明がある。

- ⑪ 「此道、すきなき人ハ……」（135）「一、謡手も鼓のうちやう不存候而ハ、……」（136）は版本にない。これらは、直前に記された道歌（ふみあてハ）の解説的内容と思われるので、道歌がないためにこの文章もないのであろう。

- ⑫ 「一、上り僧・下り僧」（137）について、版本では「一、上り僧ハ定家」「一、下り僧ハ江口」と分けて解説する。

- ⑬ 山岸本（138）で

一、脇能の次第二、五段の次第・七段の次第とて御入候。是に、しん・さう有。又、てかしら御入候而、其頭より打申候迄ハ、脇出不申候。一れみ、わきかいこ、脇の鼓の打様。

とあるが、版本は「一、脇能にハ出かしらといふ事あり」「一、かいこのをきつゝみ、常のことくそさうにうち、先置なり」「一、たつはい、わき、常のおき鼓にて脇出申候」と、より詳細に説明している。

- ⑭ 「一、大かへし」（139）の一ツ書は、版本にない。

一方、慶安三年版本の異同は、一ツ書（改行・内容の纏まり）の設定が異なっても、その大概は慶安五年版本と同じである。但し慶安三年版本には、目次があつて、本文が「恐れおほしといへとも、初心のため御笑草の種を書付進之候」から始まり、また前掲の②で指摘した「五臓のこゑ」と、③の（和歌直前の）「よき音曲と申ハ」以下（約70字）の文章が

省かれている点などは異なっている。

〔音曲道歌について〕

山岸文庫蔵『謡秘伝抄』では、謡の心得を音曲道歌によって説く記事が少なくない。音曲道歌とは、能や囃子・謡の心得を和歌に読み込んだもので、室町後期以降、主に能伝書・謡伝書の一部や単独でも書写されて流布し、江戸期の謡伝書の刊行で一層広まったとされている。だから、当然『謡秘伝抄』もそれを取り入れて解説しているわけである。『謡秘伝抄』が収める道歌は、鼓関係の伝書（宮増弥左衛門）にまとめられている歌仙系道歌群と、それに基づき、増訂されて最も広く流布した音曲道歌群の音曲百首系と宮増弥左衛門親賢系道歌群の宮増鼓道歌（鴻山文庫蔵等に伝存する室町末期筆の宮増親賢奥書の卷子本）に見える歌を含んでいる。道歌の所収数全33首の中、冒頭の部分で（「しゅあミ」と誤写しているが）音阿弥に仮託されている「音曲百首系道歌」は23首で、「宮増鼓道歌」は10首である。このような道歌は、伝承過程で随時改訂されてゆくもので、語句の違いはあっても句の形が似て趣意が同じであれば同一歌と考えられている。故に、本書と慶安版本の影響関係を踏まえて、両書の校異からも同じ道歌を記載していることが判る。しかしながら、『謡秘伝抄』と『謡之秘書』の収める道歌がまったく一致しているわけでもない。『謡之秘書』は全23首を収めており、道歌の数が少ないのである。例えば、山岸文庫本（147条）に記す音曲道歌の一群は

A 師匠にも問すはいかて教ゆへき心をくたき念比にとへ

B するはさと問ふを恥とやおもふらん問ぬハつゐの恥とこそきけ

C 音曲をきハむるほとん者なりと猶奥ふかき事を案せよ

D 人ことをわろく云なす心得ハ我身のあたになるをしらすや

E 兎に角に指をさしつゝ、笑ふとも道を嗜む事をのミしれ



F 上手こそ物きらいする事そなきやうかましきハ下手のくせなり

G 嗜まん人とハかたを当世は物しりたてと笑ふなりけり

H 下手こそハ上手の上のかさりなれ何とわろくとそしりはしすな

I 其人の弟子といひたる斗にてなさぬ稽古に師はし恨むる

と纏めて記しているが、これに相応する慶安五年版本では「一、大鼓ひとつり候て小つゝみの本地にうち候事」の項として『六韜』の引用から師弟関係を説き、次のように音曲道歌（対応の小文字を付す）を記す。

a 師匠にもとハすはいかてをしゆへきころをくたきねんころにとへ

b 能心とふをはちとやおもふらんとハぬハついのはちとこそきけ

c 音曲をきハむるほと物なりとなをおくふかき事をあんせよ

(f) 上手ハ何につけても物きらひする事ハなし、(h) 何とわろくとそしりハしすな、あるひハ(i) 誰人の弟子にて候とはかりにてけいこもせずして、どこぞにておちとのありしときハかやうにをしへられた事の、ならふた事のと申て師のはちをいふ事あり。御たしなみ有へき事にて候。

a・cは同歌で、bは初句が「するはさ」と「能心」に異同があるものの同じと見なせる歌であり、D・E・Gの歌は欠いている。f・h・iは散文の形で記されている。さらにまた両本を通観すると、右のD・E・Gの3首に次の

J 身のうへにおほえはくせもよもあらし常に鏡に向ひても見よ

K 出ぬより猶つる声の音曲のよこしまなるそせうし成ける

L 鼓をハ打テハはやすと思ふらん心をやりてうつハまれなり

M ふみあてハ目くらもへひもおちつへししらぬハやすき和哥の道かな

の4首を加えた7首は、『謡秘伝抄』にあつて慶安五年版本にない道歌である。またJの道歌は、

謡ふ時身なり顔持ち口癖は常に鏡に向かひても見よ「歌仙系道歌」

身のうへにおほえバクセハよもあらじたがひニさたを友ニとへかし「宮増鼓道歌」

の双方の上句と下句（表章氏「音曲道歌雑考」『能楽史新考（二）』所収）を取り合わせたような形になっている。そして、Mの歌は、歌仙系道歌群と考えられている般若窟文庫蔵『永正大永元安伝書』の末部に記載の音阿弥仮託の音曲道歌「音曲口伝哥」に附加されたらしい

踏み当てば盲も蛇に怖ぢつべし知らでやすきはうたひなりけり

と、同歌（表章氏同論考）である。また本書は「年ふれハ替ることのミ多き中に鼓をはやすうたひてもかな」の作を宮増弥左衛門とするが、慶安五年版本では定垣弥左衛門と明記しており、人名が違っている。

これらの道歌について、慶安三年版『謡花伝書』を見ると、項目立ては同一で、先の道歌A～MのうちでD・E・G・J・L・Mは五年版と同様に記されていない。（A・Bに続いては）F・H・Iの道歌の形になっており、また慶安五年版本の記さなかったKを収めるが、その代わりに五年版にあったCと、

N 諷ひ出す心を何と持ぬらんしうにもいふこころ成へし

がなく、記載する音曲道歌は25首となっている。そして「年ふれハ替ることのミ多き中に」には、山岸本と同じく宮増弥左衛門の名を記している。

つまり、写本の山岸本と慶安年代の版本の内容に関連があることは、確かである。しかし、奥書によって『謡之秘書』の刊行が『謡秘伝抄』の書写年次よりも早いとは言っても、両書の本文の校異から考えれば『謡秘伝抄』は慶安版本の単なる転写本でないのである。そこで、本書の有り様を知る上で『謡之秘書』に関わる写本を参照したい。

#### 四、写本『謡之秘書』

管見に入った『謡之秘書』系統の写本としては、前出の「大野本」の他に、岩国徴古館蔵本や早稲田大学演劇博物館蔵本などがある。この三種の写本を慶安版本と比べた場合、まず「大野本」に関しては、奥書は前述の通り、一ッ書の並びは同様で、文字遣いや言い回しが違ったり、短文の一ッ書（一、一座の功者より先立たないかしろに致事。一、人の諷し小謡また謡直すやうに諷事。一、我高諷出し人にはかりうたわする事）が付記されているものの、記載内容は慶安版本と同じである。音曲道歌の所収歌は、全26首で多少の出入りはあるが、版本とほとんど同歌である。さらに又「大野本」では、本文に続いて「四季ノ小謡」（春〈音信は松にこととふ〉・夏〈頼む誓は此神に〉・秋〈いさや歩ミを運ん〉・冬〈肩上の笠にハ〉）があつて奥書となり、同様に「曲舞の出声」が記されている。

岩国徴古館蔵本には奥書が記されていない。その一ッ書の順はおおむね版本と等しい（所収の道歌は全23首で、しかも「年ふれハ」は定垣の歌と記載されており、慶安五年版本と一致する）が、一ッ書の各条や本文の省略が甚だしく、代わって図と笛との比較による尺八の解説等が記されている。

延享二年（一七四五）の仮託の奥書を持った演劇博物館蔵の写本は、やはり記事の出入り（音曲道歌全26首所収）はあるが、記載の順や内容は版本、特に（「五臓のこゑ」・宮増の歌の明記等からして）慶安三年版に準じている。それから、奥書の文言は異なるものの、大野本と同じ「四季ノ小謡」や「宮王三郎・観世小次郎」の名が記されている。よって演劇

博物館蔵本は、その先後が不明ながら、版本とは異なる『謡之秘書』系の大野本に近い写本とも言えようか。また「宮王・観世」と「延享二年大久保市之尉藤原忠盈」の二種の奥書の間に「外秘事閑留」以下〈卒都婆小町・三井寺〉等の囃子に関する記事があり、末尾には脇句発句（厳生堂／俳名岫竹）がある。尚、演劇博物館蔵の写本『謡之秘書』と山岸文庫蔵写本の本文の校異によって、両書の直接的な関係は見出せなかったが、山岸本にも〈雲林院・定家〉等に関わる囃子の注と俳句の付記があるので、この点は興味深い。

## 五、山岸文庫蔵『謡秘伝抄』

『謡秘伝抄』は、版本やその他の写本と比べた結果、版本や写本で流布した『謡之秘書』系統の写本であることは確実である。にもかかわらずこの『謡秘伝抄』には、列挙した（4～10頁）ような一ツ書の順序の相違、記事に関する誤写（①）と脱文（②③⑤）或いは改変（④⑥⑫⑬）、独自の引用の本文（⑦⑧⑨⑩⑪⑭）や他の道歌（D・E・G・J・L・M）の記載等々の特色が見受けられた。例えば、先（③）に異同を言及した

よき音曲と申ハ謡の面、するくとしてかるくと、上ハふしもなきやうに聞て底にふし籠て、延ち、め沢山にて、其境、耳に立候ハぬやう二うたひ候物と申伝候。

の部分についても、山岸本・大野本・演博写本（「延享二年大久保市之尉写」と慶安五年版にあつて、慶安三年版にはない。ところが、同項の末尾に

昔ハ人の根氣つよくして、同ことを幾色も名を付習にて候と申置たると見へ申候。今ハ人の心短くなり、くとき事ははのけ候て、大形いり候ハて不叶事斗を書明し申候。

という一節があるのは大野本・演博写本・慶安三年版で、山岸本と慶安五年版には記されていない。また、音曲説の項目(107)は、

……闌曲ハ右ニ申ことく、同曲成就して打よせて謡候ニより、乱曲共書申候。引歌・たとへなど数多云置候得共、いかほと見申ても合点不参物にて候。小謡一ツと五色二声をかへて諷分る人ニハ、稽古可有候。一度にて合点可参候。当代、左様ニハ謡分候人、稀ニ候。祝言を不祝言に御謡候衆はかりにて候。

とあって、少しばかりの異同があるものの、版本・写本の何れの記載も同じと言える。尤も慶安五年版本だけは「一度にて合点可参候」以下を「一、座にても御合点可参候。」と一ツ書の別立てにしている。この点、「一度」が本来の形で、慶安五年版の別立ては誤りと思われる。

以上、謡伝書諸本の影響関係を断定することは、一様に困難である。だが、例示したように、山岸文庫蔵の本書は、慶安版本の転写本でも省略本でもないようだし、大野本・演博本の両写本と酷似しているわけでもない。『謡之秘書』系統の中では、かなり特異な一本と言えよう。とすれば、伝来過程において多数存在していたであろう慶安版本の底本となった写本の一つに、『謡秘伝抄』があつた可能性も考えたいところなのである。

末筆ながら、解題執筆の遅延を御詫び申し上げます。また法政大学能楽研究所・早稲田大学演劇博物館よりは、貴重な資料の閲覧を御許し頂きました。御礼を申し上げます。